

研究 成果 情報	園芸	10	野菜	病害虫
新技術・情報名	クルミネグサレセンチュウに対する対抗植物の密度抑制効果		分類	③

1. 成果の内容

1) 技術、情報の内容及び特徴

いちごの根腐萎ちょう症の原因となるクルミネグサレセンチュウに対する対抗植物（アフリカン・マリーゴールド）の密度抑制効果を定量的に評価した。マリーゴールド単独による線虫防除効果は期待できない。

(1) 線虫密度はマリーゴールド定植区で処理開始時の線虫密度の約5%、無処理区及びいちご定植区でも約15%まで減少した。対抗植物の有無に関わらず線虫密度が低下した原因は、夏季の高温等の要因による線虫密度の抑制による。

(2) 8月以降においてもマリーゴールド区の線虫密度は1ヶ月半で約62%まで抑制されたが、いちご苗を定植した10月上旬での線虫密度は乾土20g当たり56.2頭と高く、許容可能な密度までの低下は認められない。

2) 技術・情報の適用効果

クルミネグサレセンチュウに対する対抗植物としてのアフリカン・マリーゴールドの密度抑制効果に関する基礎資料となる。

3) 適用範囲

試験研究機関および普及機関

4) 成果の利活用・普及指導上の留意点

クルミネグサレセンチュウは気候要因等により大きく影響されるため、対抗植物の評価に際しては、これらの要因と対抗植物固有の抑制効果とを区別する必要がある。

2. 具体的データ

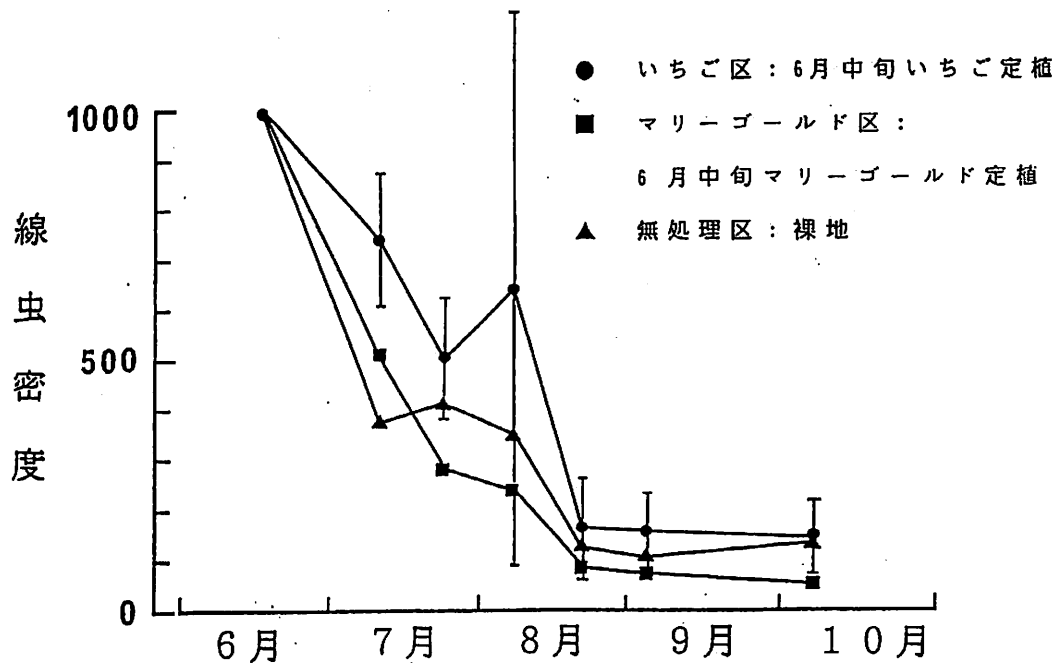


図1 対抗植物によるクルミネグサレセンチュウの密度抑制効果(平成3年)
(線虫密度は各区の平均値、いちご区のみ平均値と標準偏差を示した)

表1 いちご定植前(10月)におけるクルミネグサレセンチュウ密度(平成3年)

	無処理区	いちご区	マリーゴールド区
平均密度	130.6 a	145.8 b	56.2 b
標準誤差	13.6	16.1	7.3
レンジ	195-31	374-45	132-17

注) ①同一の英小文字を付した平均値間に1%水準での有意差はない。
②対数変換後、Duncan's multiple range testにより検定。

3. その他特記事項

担当部科室名：生産環境研究所 病害虫部 野菜花き病害虫研究室
 研究担当者名：大野和朗、中村利宣、池田 弘
 研究課題名：対抗植物利用による防除
 期 間：平成1年～平成3年
 予算区分：経常
 既発表論文・資料名等：平成3年度野菜花き病害虫関係試験成績概要書
 九州病害虫研究会 第38巻 1992(投稿中)
 取りまとめ責任者名：大野和朗